

留学生と創る！「京文化（能・酒造等） マイクロツーリズム読本」

1年間という長いスパンの中で、一度も中弛みなく、自分たちの立てた目的に向かって直向きに努力していたと思います。夏休みには、多くの能や日本酒の関係者のもとへ取材に行ったり、SNSで随時フォロワーに対して活動報告をしたりと、授業外の活動にも力を入れていましたね。

「読本を作成し、その読本を留学生の授業で使用する」というプロジェクトの最終目標への道のりの中で、授業を受けた留学生のみならず、その他多くの外国人、さらには日本人にも能や日本酒の魅力を発信し、京都ファンを増やしていたと思います。

非常に難しいプロジェクトでしたが、それを上手く進めることができていたのは、メンバー1人1人が同じ目的や目標に向かい、同じベクトルで精力的に活動していたからだと思います！本当に素晴らしい！1年間お疲れ様でした！

ラジオの魅力 —学生パーソナリティーの現場から高齢者へ—

ラジオ番組を企画する。実際に制作する。リスナーへの効果を調査・検証する。また、その中にながら、プロジェクトの全体像にも目を配る。履修生にとっては、こうした段階ごとに、それぞれ異なる難しさがあったと思う。何を準備するのか。どんな人がかかわるのか。発信と受信のバランスはどうか。これらに応じて、求められる能力があり、与えられる時間がある。そして、ラジオは言葉を中心とし、かつ、リスナーの存在を前提とするから、情報や想いを言語化し、それを相手に向けて伝えることの重要性は、特に身にしみたのではないか。慣れない作業に戸惑い、手間取ることもあったと思うが、履修生は互いに連携し、試行錯誤しながらよく取り組んでいた。

京都の伝統織物ができるまで —オンライン体験を考える—

錦織を一から学んだ春学期、その魅力に感化され、伝え方を模索した夏休み、イベント準備で遅くまで議論した秋学期と、一年を通して走り考え続けたプロジェクト。6名という少人数のため一人ひとりの負担は少なくなく、就職活動や卒業論文等との両立が難しい時期もありましたね。一方で全員が当事者意識を持ち、深いコミュニケーションを取ることができたのも、この6名だからこそです。時には対立することもありましたが、共に議論し苦楽を共にした大切な「仲間」との時間は、きっと一生ものの経験となったはず。SAという立場ではありましたが、一人の仲間として受け入れてくれたみんな、ご指導いただいた先生方、一年間ありがとうございました。

地域の共感をよぶ映像制作 ～まちづくり観光の視点から～

SAとして1年間プロジェクトに関わらせていただいた中で、履修生の皆さんひとりひとりが自分の役割を見つけ、積極的に行動している姿が非常に印象的でした。履修生5人という比較的少人数での活動ではありましたが、それを強みにしたまさに少数精鋭のチームだったと感じています。「共感をよぶとはどういうことなのか」、そして「共感をよんだ先にはなにがあるのか」など、本プロジェクトのテーマに履修生の皆さんが真摯に向き合ってきたからこそ、映像作品を完成させ、上映することができたのだと思います。また、そのようなみなさんの姿に私も多くのことを学ばせていただきました。

最後になりましたが、履修生の皆さん、先生方、本プロジェクトにご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

つながりを取り戻す コミュニティスペースのデザイン

私は昨年度この科目を履修生として受講していました。今年度はSAとして、履修生をサポートする身として参加させていただきました。昨年度と全く同じテーマなわけではないですが、新型コロナウイルスの影響がある制限された中でも、履修生たち自身がよく考え、行動していたのではないかと感じます。リーダーの松崎くんを中心に、1人1人が科目のテーマに沿って考え、どのようなことを実行していけるのかということ全員で意見を出し合いながら1つのイベントを形にしていったという印象を受けています。時にはアドバイスとして声をかけることもありましたが、基本的には履修生たち自身がよく働きかけていたと感じています。新しいことを1から作り上げる楽しさと難しさを実感できた1年間だったのではないかとSAとして感じています。

「子育て×働く」のリアルを探求する キャリア教育プロジェクト

この科目は、履修生が全員女性であり、最初は女性目線での「キャリア」や「子育て」を考えていくと思いましたが、活動の中でしっかり男性を巻き込み、いい意味で性別にとらわれない「子育て×働く」を模索できたのではないかと感じています。今年で大学を卒業し来年から働く側に回る自分にとっても、SAをしながらすごく勉強になり、将来を考える良いきっかけになりました。1年間という短い期間の中で、冊子作成や座談会開催など多くの活動を行い、成果を出していった素晴らしいプロジェクトでした。メンバーの皆さん、先生、本当にお疲れ様でした。

京都・伏見で酒ツーリズムのしくみをつくる

このチーム最大の強みは「意見が対立しても、全員が相手の意見を尊重して話し合える」ところです。

春学期は履修生どうしの距離が縮まっておらず、正直不安を感じていました。しかし、リーダーをはじめとする一人一人の積極的な活動によって、対立することがあっても、お互いを思いやり、意見を尊重しあえる素敵なチームになっていました。

そんな皆さんが創り上げたツアーは、参加者はもちろん伏見の皆様にも高評価を頂ける素晴らしいものだったと思います。

私自身、SAとしてのサポートが難しいと感じることもありましたが、履修生の皆さんや先生のおかげで沢山の学びも得ることが出来ました。

先生方、履修生の皆様、そしてプロジェクト事務局の皆様ありがとうございました。

京都の魅力を発掘し、持続可能な体験型観光商品を作成・実施

コロナ禍で新たな観光形態として登場したオンラインツアーは、観光業従事者の方も模索しながら行われているほど、多くの課題や可能性に満ちたものです。それを履修生が一から作るにあたり、最初は手探りでしたが、一人一人が工夫を重ね、最終的にはお客様を楽しませる素晴らしいツアーを作り上げたことを、僥越ながらとても誇らしく思います。SAとして然るべきサポートができているかは常に私の課題でしたが、授業を重ねるごとに急速に成長していく履修生の姿に刺激をもらいながら、このプロジェクトに関われたことを、喜ばしく思います。

履修生の皆さんは、今回得た学びをこれからの人生にも是非生かしてほしいと思います。

最後になりますが、履修生をはじめ、先生方、このプロジェクトに関わった全ての皆様に感謝申し上げます。

クリエイティブな映像制作でインターネットの安心安全を守る！

SAとして携わらせていただいたプロジェクト活動は、昨年に引き続きとても学びの多い時間でした。開講初年度の科目ということで全員が手探りの状況の中、リーダーを中心に「目に見える成果」を数多く生み出した履修生たちは素晴らしかったです。特に秋学期は春の反省を活かした動きや工夫が随所に見られ、その成果が形となって表れていました。活動すればするだけ、それ相応の学びが得られる時間だったのではないかと思います。先達がない中、一年間のプロジェクト活動を走り抜けた履修生の皆さん、本当にお疲れ様でした。

最後になりますが、2年間のプロジェクト活動を通してお世話になった先生方、事務局、履修生の皆さん、本当にありがとうございました。

京丹後移住促進プロジェクト ～新たな地方移住の仕組みづくり～

春学期の半年間、このプロジェクト科目にティーチングアシスタント（TA）として参加させていただきました。京都北部に位置する間人地区への移住促進という大きな目標を掲げており、プロジェクト開始当初は1年間で何ができるのか皆目見当がついていませんでした。私はTAとして何ができるのか科目担当・代表者と探りながら、講義内で行われるワークショップを懸命に取り組み履修生のサポートを行ってきました。初回の授業では、履修生同士が初対面でごちないコミュニケーションでしたが、回を重ねるたびに履修生間の信頼関係が強くなっていき、講義内のワークショップで行われる議論も実のあるものになっていきました。履修生個々人が主体性を持って行動できるようになったため、TAとしてサポートすることが少なかったことが申し訳ない気持ちでいっぱいですが、秋学期での更なる進展を陰ながら期待しております。

京丹後移住促進プロジェクト ～新たな地方移住の仕組みづくり～

まずは一年間、本当にお疲れ様でした。移住促進という長期的で壮大なテーマに対して、授業外の時間も熱く議論されており、物凄く積極的に取り組んでおられたと思います。また、皆様の意欲的な活動や議論をそばで見ている立場として、移住促進プロジェクトに対する熱量が地域住民の方々にも伝播していき、好循環を生み出していた様子を見てとれたのは大変嬉しく思いました。

移住促進は短期的に解決できる課題ではないため、この一年間の活動が来年度の履修生に繋がっていき、さらに飛躍していくことを期待しています。

最後に、短い間でしたがお世話になりました。先生方や履修生の皆様、事務局の皆様にも深く感謝いたします。

教科書に載っていない古典の魅力を探る くずし字教材の開発と実践

このプロジェクトは、現代の日常や教科教育において敬遠されがちな古典、それもくずし字を扱うというもので、その達成は非常に難しく、また重大なものでした。初め、メンバーの皆さんはプロジェクトの運営方法が分からなかったり、目標設定に苦戦したりしていました。でも、時間を重ねて話し合いを行うことで少しずつ行動の指針が分かってきたようでした。何より1人1人の個性を生かし、楽しく取り組むことができたように思えます。今回のプロジェクトでは、このメンバーならではの傑作が複数生み出され、各方面からの評価もあり、更なる展開も期待できる素晴らしい取り組みができたと思います。TAとしてこのようなプロジェクトのサポートができたことを嬉しく思います。